

「のち知るべし」の信仰

丸山 勉

【聖書】創世記 37 章 1～11 節

ヤコブは、父がかつて滞在していたカナン地方に住んでいた。ヤコブの家族の由来は次のとおりである。ヨセフは十七歳のとき、兄たちと羊の群れを飼っていた。まだ若く、父の側女ビルハやジルパの子供たちと一緒にいた。ヨセフは兄たちのことを父に告げ口した。イスラエルは、ヨセフが年寄り子であったので、どの息子よりもかわいがり、彼には裾の長い晴れ着を作ってやった。兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった。ヨセフは夢を見て、それを兄たちに語ったので、彼らはますます憎むようになった。ヨセフは言った。「聞いてください。わたしはこんな夢を見ました。畑でわたしたちが束を結わえていると、いきなりわたしの束が起き上がり、まっすぐに立ったのです。すると、兄さんたちの束が周りに集まって来て、わたしの束にひれ伏しました。」兄たちはヨセフに言った。「なに、お前が我々の王になるというのか。お前が我々を支配するというのか。」兄たちは夢とその言葉のために、ヨセフをますます憎んだ。ヨセフはまた別の夢を見て、それを兄たちに話した。「わたしはまた夢を見ました。太陽と月と十一の星がわたしにひれ伏しているのです。」今度は兄たちだけでなく、父にも話した。父はヨセフを叱って言った。「一体どういうことだ、お前が見たその夢は。わたしもお母さんも兄さんたちも、お前の前に行って、地面にひれ伏すというのか。」兄たちはヨセフをねたんだが、父はこのことを心に留めた。

【序】ヨセフ物語と「創世記」

7月に入りました。今月と来月は創世記の「ヨセフ物語」を学ぶことになっています。今日はこの物語の導入部分である37章の前半のみです。

ヨセフという人物は、父ヤコブの11番目の子どもです。ヤコブには12人の息子を儲けたのですが、父ヤコブにとって、このヨセフは愛妻ラケルとの間の最初の子でもあり、特に可愛がりました。ちなみに、その下にはベニヤミンという子が生まれましたが、母であるラケルはその子を産んで死んでしまいました（35章）。

そして、今日の37章は、ヨセフが17才の時の話です。読んでいていかがでしょうか？ 私たちは、この後の、まるで大河ドラマのようなヨセフ物語のあらすじを既に知っていますから、これがその導入部なのね、とサラリと読んでしまうのですが、ここにはなかなかデリケートな人間の心（罪の心と言っても良いでしょう）というものが良く描かれているように思います。実際、来週読む部分では、兄たちの妬みの心が爆発して、そこからこの家族の波乱万丈のストーリーが展開していくわけですが、今日の所は、そのダイナマイトの導火線のような部分だと思います。

実は、この37章では「神」とか「主」とかいう言葉は一度も出てきません。「信仰深い」と言うよりは、とても人間臭い、生々しい話です。

ちょっと余談ですが、このヨセフ物語は「創世記」の中のかなりの部分を占めています。37章から50章までです。考えてみると「創世記」、つまり天地宇宙また人間の創造の話というのは第2章位迄ですね、文字通り「創世」と言うのは。けれども元々のヘブル語では、この書物は「ベレーシス」と言って、それは「初めに」といった言葉なのだそうです。1:1の「初めに神は天地を創造された」から取られたわけですが、「初め」というのは意味が深いと思いました。ここには、天地の初めだけでなく、人間という存在の「初め」、また罪の「初め」、そしてそこに神様がどのように手を差し伸べて下さったのか、その「初め」が描かれている書物であり、その意味で、創世記の中のこのヨセフ物語は重要な位置を占めているとも言えます。

[1] 穏やかさ(シャーローム)の喪失

今日の箇所の中で見過ごしに出来ない言葉は、4節の「**兄たちは、父がどの兄弟よりもヨセフをかわいがるのを見て、ヨセフを憎み、穏やかに話すこともできなかった**」という中の、「**穏やかに話すこともできなかった**」というところだと思います。兄弟の中の不和です。そのちょうど逆が、この聖句です。詩編133:1「**見よ、兄弟が共に座っている。なんと恵み、なんと喜び**」。——最も近い肉親である兄弟の中に不和がある。「穏やかに話すことが出来ない」というのは、「シャーロームが失われている」ということです。神様の平安がそこに無いということです。

そこにはある意味、具体的な「原因」がありました。父ヤコブの、ヨセフに対するえこ贔屓です。愛するラケルの最初の、しかも年寄り子で偏愛していた。しかも、このヨセフには特別の晴れ着を着せていたというのです。これはサムエル記などにもありますが、殆ど王女さまが着る様な物で、こんなものを着ていたら、とても労働など出来ません。他の兄たちが妬むのも無理のないことでしょう。これは父ヤコブが愚かだと言えるでしょう。けれども、このヨセフもどうでしょう。17才になっています。自分がどのように兄たちから見られているのか分からないのでしょうか、余りに無邪気です。自分の見た夢を、そのまま「聞いて、聞いて」という感じで話している。二度もです。実際このような兄弟がいたら、私たち嫌な気持ちになると思います。そして、兄たちも「穏やかに話すことが出来ない」というところから始まって、それが遂には、こんな弟はいらない、売り飛ばしてしまおう、という残酷な思いまで発展してしまっているのです。聖書というのは、人間同士の破れがどういって所から始まるのか、それをリアルに描いていると思います。

では、今日の所で何か救いのようなものは無いのでしょうか？ 私は、それもま

た暗示されていると思います。それはヨセフが「夢」を見たということと、また、これらの出来事をヤコブが「心に留めた」(11 節) ということではないかと思えます。

[2] 「夢」の中の主のご計画を思う

ヨセフは二つの夢を見たことを語っています。6 節からの「畑で束を結わえていると、兄たちの束が自分の束にひれ伏した」という夢と、9 節以下にある「太陽と月と十一の星が自分にひれ伏した」という夢です。ヨセフはこれをそのまま無神経に語ったので兄たちの反感を買ったわけですが、この夢は、やがてヨセフが売られて行ったエジプトにおいて現実になりました。

当時の「夢」というのは、現代とは違う意味があるそうです。今の時代は、「夢」とは、すべてが解明した訳ではないでしょうが、人間の心の奥底に隠された深層心理から生じるものという説明がなされます。けれども、聖書で語る「夢」というのは、そこに神様のみ旨、ご計画が表されている、という理解があります。つまり、自分自身の深い心の現れと言うよりも、神様のみ心の現れということです。ですから、ヨセフにしてみれば、自分を誇る気持ちはさらさら無く、ただ「こんなことを神様は夢で告げたよ」と教えるだけだったのだと思います。けれども言われた人はどう思うか、その想像力が欠けていたということなのだと思います。

父ヤコブも、ヨセフの二度目の夢を聞くと穏やかになれず、「一体どういうことだ、お前が見たその夢は。わたしもお母さんも兄さんたちも、お前の前に行って、地面にひれ伏すというのか」と叱りました。けれどもこのあとで聖書はこう記しています。11 節。「兄たちはヨセフをねたんだが、父はこのことを心に留めた。」と。「心に留める」。これは大事な言葉だと思います。父ヤコブは、兄たちのように熱くなってしまったのではなく、冷静に受け止めました。この出来事の意味を思い巡らそうとしたのです。何故この子がこんな無神経なことを言うのか、自分の子育ての反省もあったかもしれませんが、それ以上にヤコブは、ヨセフの言動や夢に「神様のみ心やご計画」が示されているのではないかと静かに考えたのだと思います。

これは、あの受胎告知を御使いから受けたマリアもそうでしたよね。「マリアはこのあいさつは何のことかと考え込んだ」とありますし、羊飼いの報告を聞いた時は、「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」と記されています。

聖書の基本は、「神語り給う」、「人、聴く」という関係です。そして、それは生涯に亘る、神様と私たち人間のやり取りなのではないでしょうか？

私たちが生きて行く時には、「何故、今こんなことが起こるのか」とか「こんな

結果になるなんて思いもしなかった」と、時折あるのではないかと思います。良かれと思ってしたことが裏目に出ることもあります。「何でこんな目に遭わなければいけないのか」とその理不尽さに打ちのめされる時もあると思います。そのような時、私たちは「神様などいるのだろうか」、或いは「神様も私を見捨てられた」と思ってしまいがちです。けれども、そういうことなのではないでしょうか？私はそうではないと思います。

【3】 「原因」ではなく、神様の「時」がある

先ほど私は、ヨセフの兄弟たちが「穏やか」でいられなくなった、それには具体的な原因があると言いました。確かに父親の偏愛がありました。ヨセフの無神経さがありました。しかし、だからと言って兄弟を売り飛ばす理由にはならないのではないのでしょうか？ それは正当化出来ることなのではないでしょうか？ 「原因」は「原因」としてしっかり見ていかねばならないと思いますが、すべてをそれに帰してしまったら、人間関係はギスギスになってしまうと思います。風通しが悪すぎます。ヨセフの兄たちもそうでした。

私は思うのですが、この世は残念ながら納得のいかないことが多く起こりますよね。社会的・政治的なこともそうですし、それこそ身近な人間関係で辛い目に遭うことだってあると思います。色々な「時」があるのです。旧約聖書コヘレトの言葉の3章には、「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある」として、色々な時が書かれています。「生まれる時、死ぬ時」から始まって、「泣く時、笑う時、嘆く時、踊る時、愛する時、憎む時…」と言っています。

私たちは何か不幸なことが起こる時、その「原因」を探ろうとします。「何か原因があるはずだ」と。因果応報の捉え方です。けれども、聖書は、それとは違います。因果応報の捉え方は、それはいわゆる“犯人探し”になってしまうのです。こういうことになったのは、あなたの子育てが悪かったからだ、とか、環境が悪かったからだとか、そもそも人間として出来が悪いとか、救いようもないことを私たち人間は平気で言うてしまうことがあります。…けれども、聖書はそうではないのです！ 「すべてのことには「原因」があるのではなく、「時」がある、と言うのです。私は、これは大きな慰めだと思いました。そして、この「時」を知り、「時」を支配しておられるお方がいらっしゃる、ということが私たちの救いです。

事実、このあとのヨセフの生涯は、正にその「時」を支配されている神様の導きの中で不思議に導かれ、最後には異郷エジプトの地で、兄弟の涙ながらの**和解の出来事**(「**シャーローム**」の回復)に結実しています。父ヤコブも、最期は子供たちを皆祝福し、遺言通り、アブラハム、イサク、リベカも眠る先祖の土地で葬られました。

私たちの生涯の「時」も、すべて神様の御手の中にあるのです。「因果応報」や「運命」ではなく、神様の「摂理」の中にある！ ということです。

[結] 「のち知るべし」で良い。

今日はこのあとイエス様が制定された「主の晩餐式」を執り行います。これは十字架に架かれる前日の夜の出来事でした。ヨハネによる福音書では、その直前に、弟子たち皆の足をイエス様ご自身が洗われた、という記事が記されています（ヨハネ 13 章）。その時、ペトロは恐れ驚いて、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言いました。けれどもイエス様は、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」とおっしゃったのです。

この「今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」ということ、これが私たちの人生、私たちの信仰の歩みなのではないでしょうか？ 文語訳で「のち悟るべし」「のち知るべし」です。後になって、主の御旨、ご計画が見える時があるのだ、と。ヨセフの生涯もそうでした。私たちの人生も、今は手探りで歩んでいる様なものなのかもしれません。けれども、それで良いのだと思います。イエス様は「後で、分かるようになる」とお約束下さっています。私たちの地上の生涯の中では解決が出来ないこともあると思いますが、それでも、必ず「のち知るべし」です。

イエス様は、この私たちの地上の人生を、責任を持って「いつも共にいる」と一緒に歩いて下さるお方です。このお方を仰ぎながら生きてゆきたいと思います。イエス様は、私たちのこの地上で犯す罪を全部背負って下さって十字架に架かって下さったお方、そして、復活されて、私たちに永遠の住まいを約束して下さっているお方なのですから！

お祈りを致します。